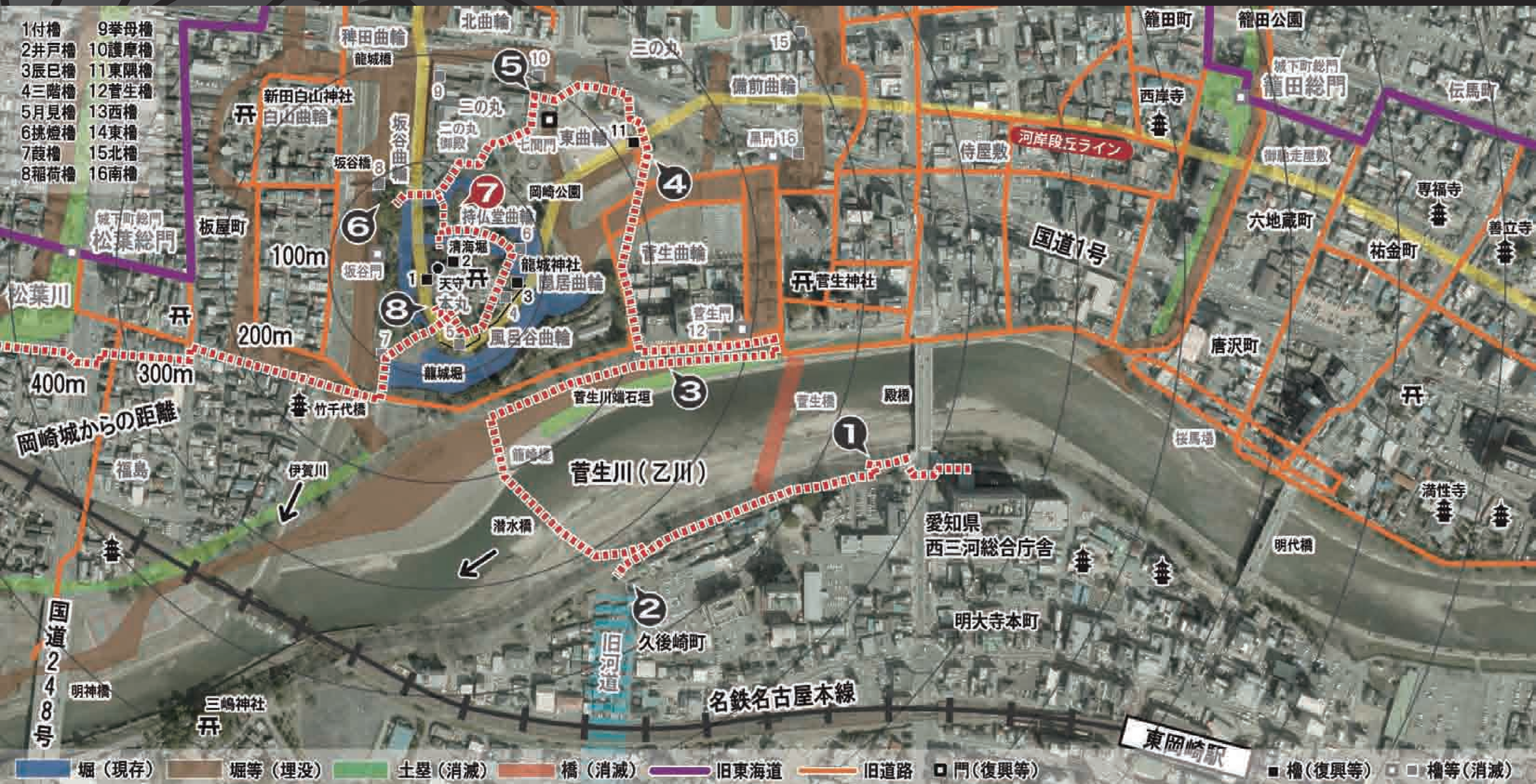


07 絶対に攻めたくない 複雑に入組む縄張り



複雑で堅固な縄張りー中世と近世の城郭特徴を併せ持つ

本丸と持仏堂曲輪の間には、創築者の西郷頼嗣（清海入道）の名の付く「清海堀」が切られる。幅が狭く湾曲する二重の空堀である。二の丸から本丸へ至るルートにおいて、馬出しを重ね、空堀の間を通す細い帯曲輪で構成された複雑な縄張り（城を守るための設計）は、横矢を確実に掛ける中

世城郭の到達点といえる形態となっていた。清海堀は、幅が狭くて深く、曲線を描いており、水がない空堀で、内周側は土手になっている。これは家康公が居城した頃の中世城郭の特徴。向かい合う外周側は石垣。これは後に城主となった豊臣方の田中吉政以降に築かれたもので近世城郭の特徴。

※1 城を構成する本丸など一定の広さを持った区画のこと ※2 城の出入口前に設けられた小曲輪の攻撃・防御の施設 ※3 敵の側面から矢を射ること

清海堀



最初に掘られた本丸北の空堀。家康公在城期がしのばれ、中世の土造りと近世の石造りが同居した岡崎城の特徴を最もあらわす眺めである。ダイナミックな美しい曲線が印象的。

帯曲輪と二重の空堀



空堀が二重に構えられ、敵が本丸に侵入するには、入口から180度折れ曲がり、両側を堀に挟まれた細く狭い通路を進まなければならない。非常に戦略的な隙がなく守り堅い縄張りである。

廊下橋



敵から身を守るため、堀や屋根を設けた廊下橋は、天守から直接、本丸外の持仏堂曲輪に繋がる日本唯一の構造。大正9年（1920）にアーチのある石橋となった。

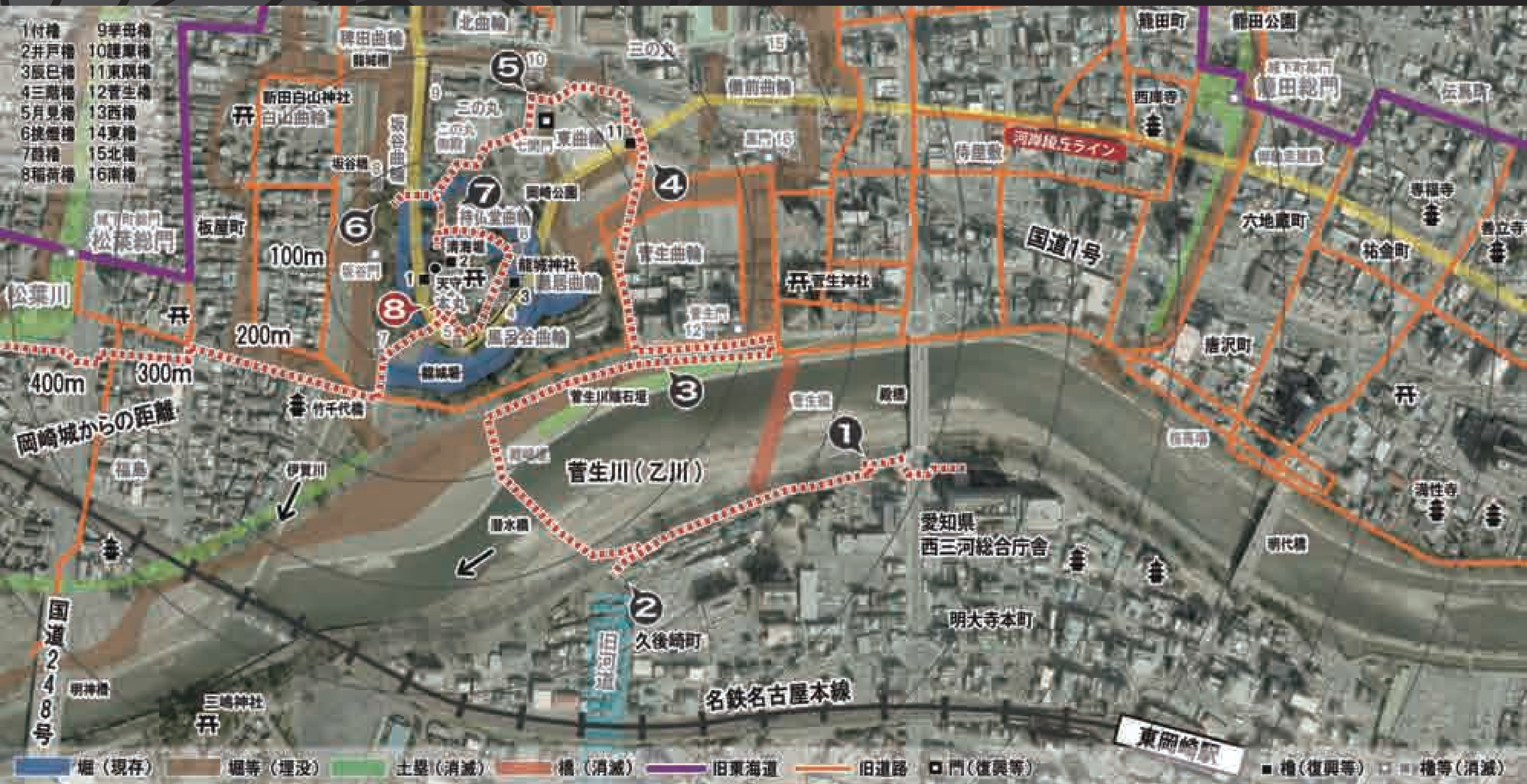
天守台の鏡石



鏡石は、城の正面である大手や通路の正面などに据え付けられた巨石で、岡崎城では天守台の北側に1石と東側に2石の大きな鏡石が合計3石、据えられている。

08

全ての歴史が重なる 築城以来の中心部



りゅう どう ざん

龍頭山—当初の選地から廃城までの中心部

岡崎城の本丸は、標高約 24 メートルの「龍頭山」に築かれた。龍頭山は、岡崎を南北に貫く矢作川と、東部の三河山地から西へ流れる菅生川（乙川）との合流点に向かい突出する北東の愛宕丘陵から延びる半島状地形の南西端にあたる。

この地は矢作川が西方の、菅生川が南方

に対する天然の守りとなっており、岡崎平野の低地を見渡せる「防御の要衝」の地であった。そして、矢作川と東海道の結節点でもあり、「交通の要衝」もおさえていた。

現在も、本丸には築城から廃城時に至るまでの城中心部の遺構が累積している。

天守



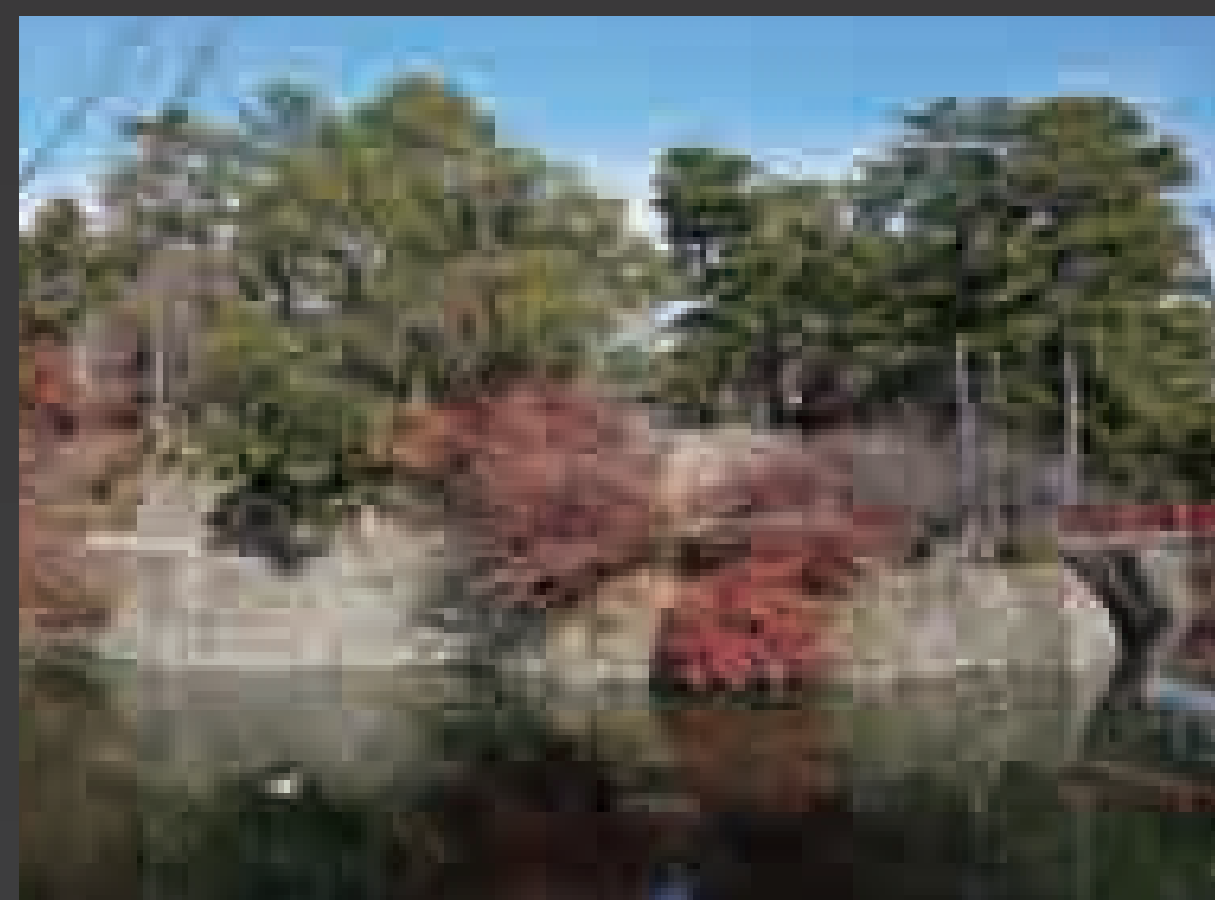
初代の天守は、天正 18 年（1590）に城主となった田中吉政が建てたと考えられ、付櫓を持ち、天守台下に L 字形の通路が巡る点で豊臣大坂城の天守台と相似形である。

取り壊し前の岡崎城天守



明治 6 年（1873）から 7 年にかけて取り壊される前の明治 5 年（1872）の南東からの姿。現在の天守は昭和 34 年（1959）に外観復興。左は月見櫓、右は辰巳櫓と推定。

不整形な本丸外周



河川の作用で細く残された丘陵先端部の原地形を活かし、平面が不等辺多角形の本丸が形成された。本丸の標高は約 24 メートルで菅生曲輪との高低差は約 8 メートル。

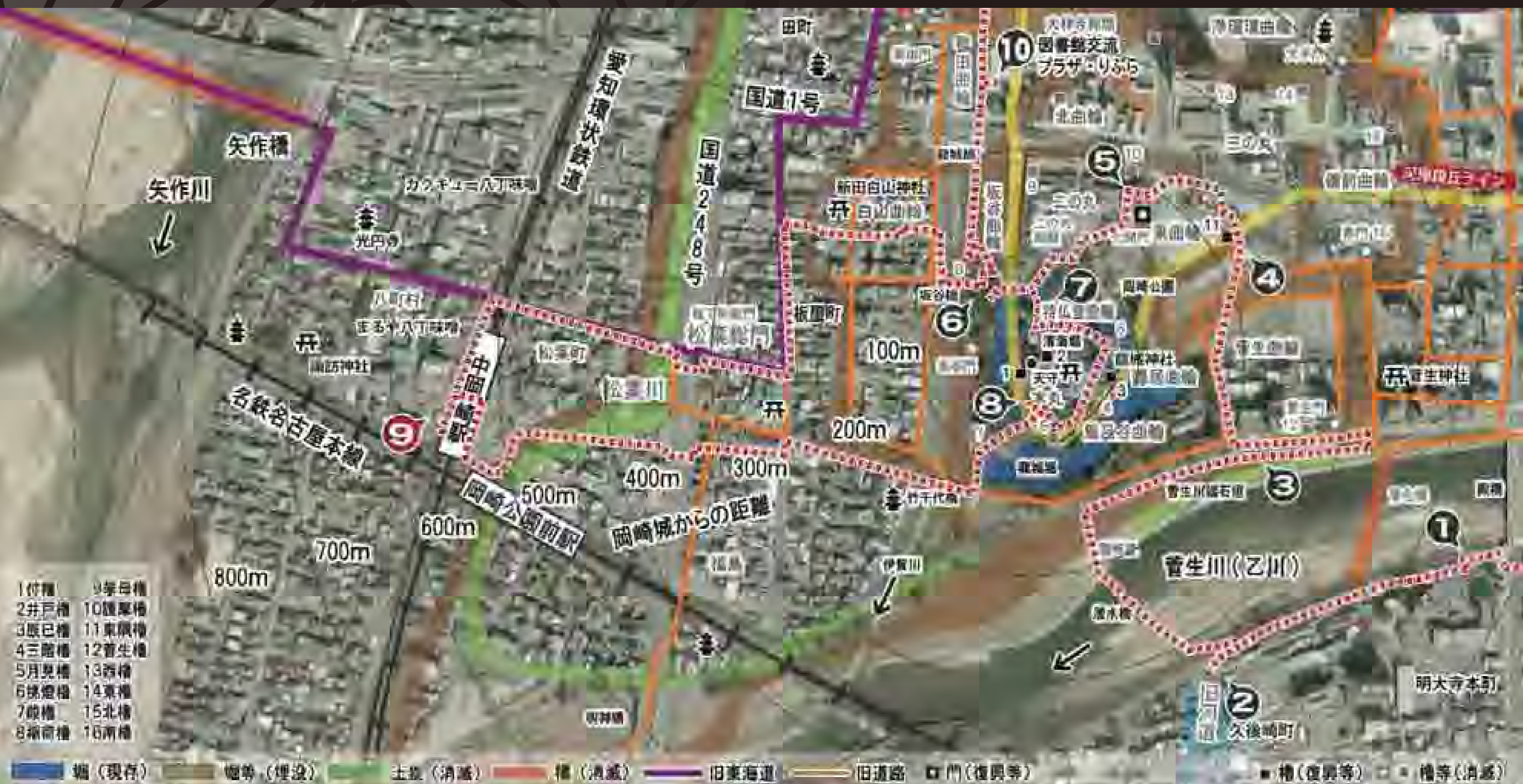
本丸の石垣



岡崎城の石垣には主に花崗岩を用い、天守台には大型の自然石が多く選ばれた。心柱の礎石は日本最大級。本丸入口の両脇には、石の全面を加工した見事な切込接ぎの石垣。

09

この土地にこだわり 受け継がれし至高の赤



矢作川と矢作宿—古代からの渡河点と宿場

矢作川には、古代より東海道の宿駅が置かれ、渡船場が設置された。以来、東海道と舟運の要地となり、鎌倉時代には両岸が

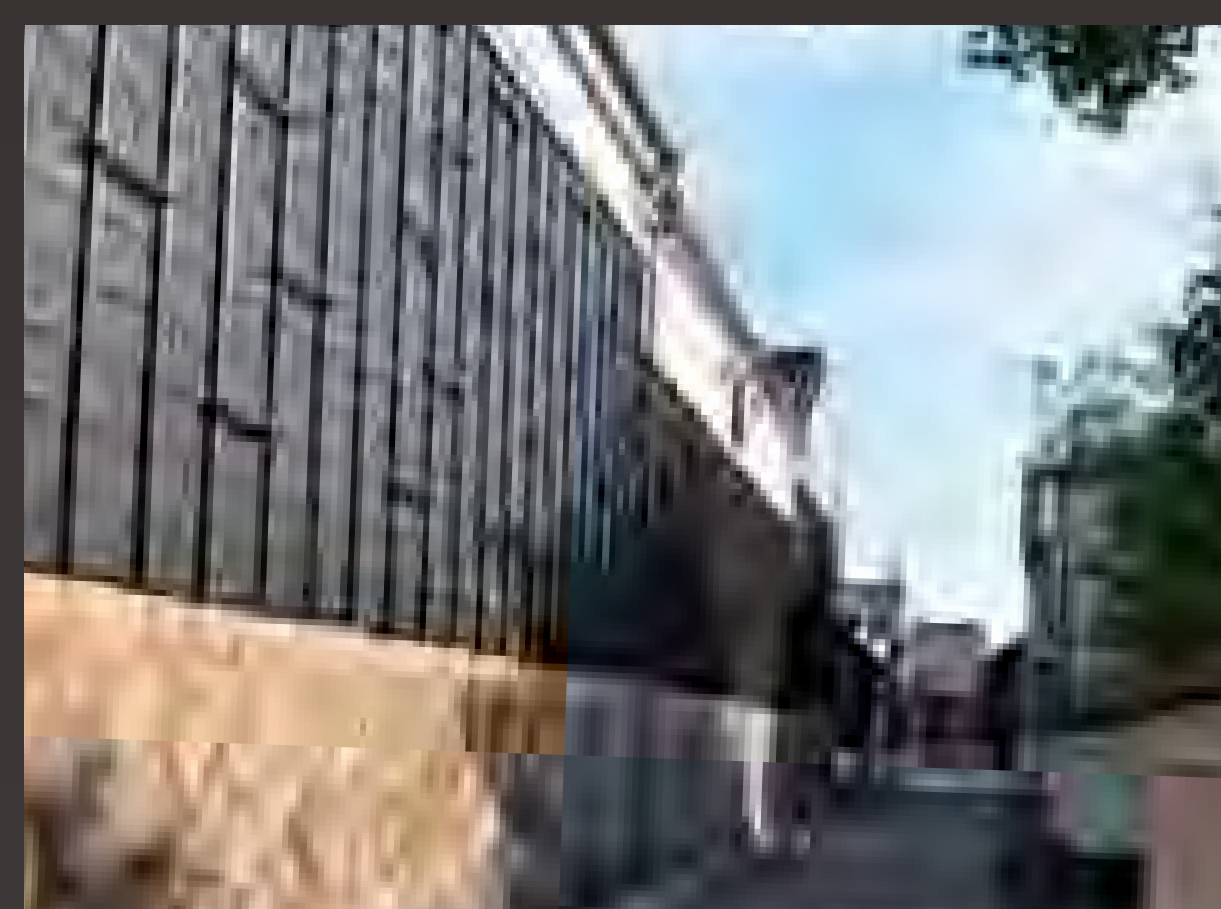
矢作西宿・東宿として栄え、足利義氏が屋敷を構え将軍も宿泊した。

八丁味噌と舟運・街道—中世以来の産業と物流

塩・大豆の荷揚げと豊富な伏流水で豆味噌製造が行われ、洪水が起きても移転せず、

老舗2社が、この地で二夏二冬の長期熟成による伝統製法の味噌造りを続けている。

八丁味噌蔵とまちなみ



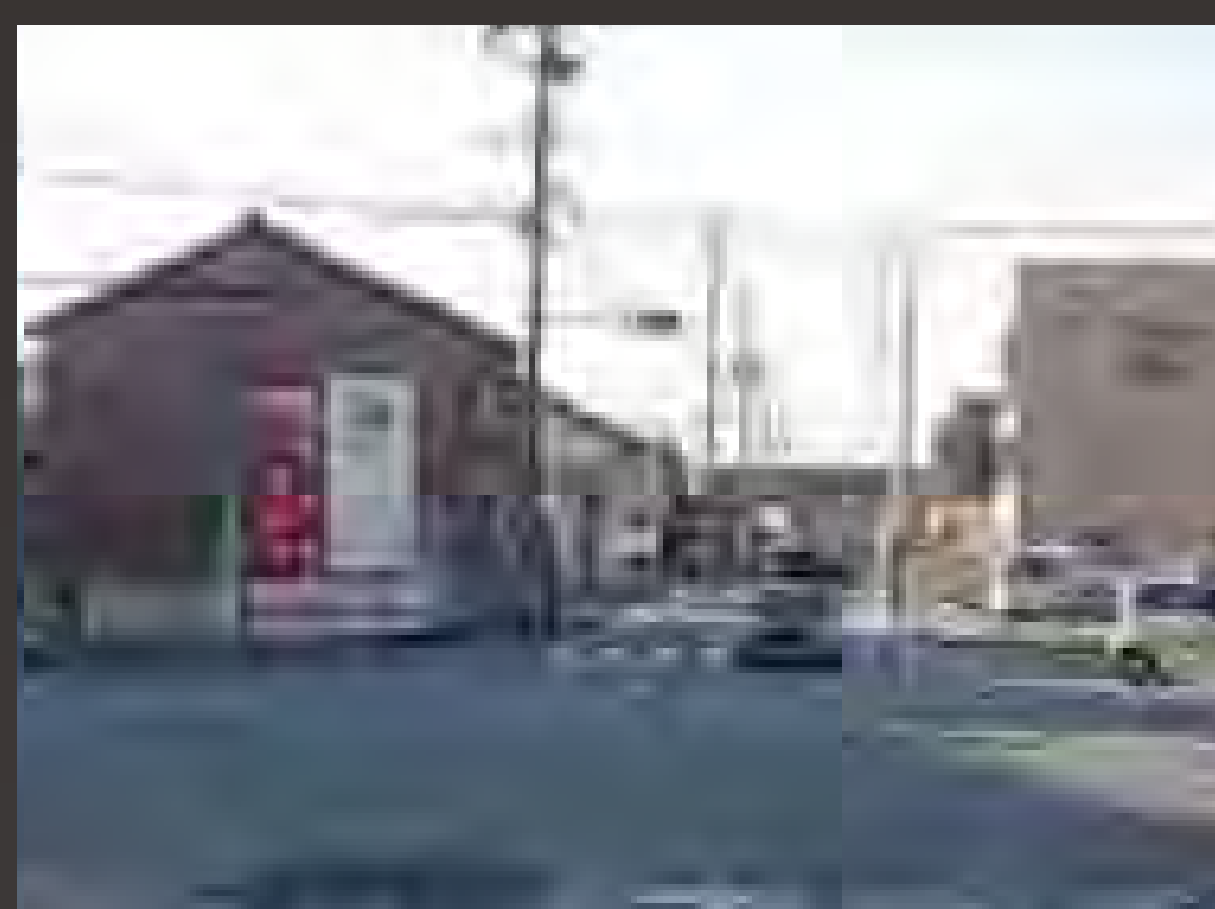
「八丁蔵通り」は、花崗岩の石垣、光円寺の白壁、そして味噌蔵群の統一感ある黒壁のコントラストが約180メートルに渡って続き、香りと共に歴史的な風情を醸し出している。

矢作東宿と八町村



中世の矢作東宿に連なる八町村では、松平氏の物資を扱う商人が家康公からの塩の専売「塩座」の特権を受け、物流の要地で流通を担った。

松葉総門



承応3年(1654)水野忠善の時代に、岡崎城総構えの西の出入口、板屋町西端に設けられた。内側の枳形には番所も置かれ、東海道の往来する通行者をあらためた。

新田白山神社の外堀跡



家康公が上野国新田から勧請したと伝える白山神社は、白山曲輪にあった。現在の境内地の本殿西側は、白山曲輪の外堀跡が弧状の区画となって残されている。

10 山も谷も町へ 近世の造成功

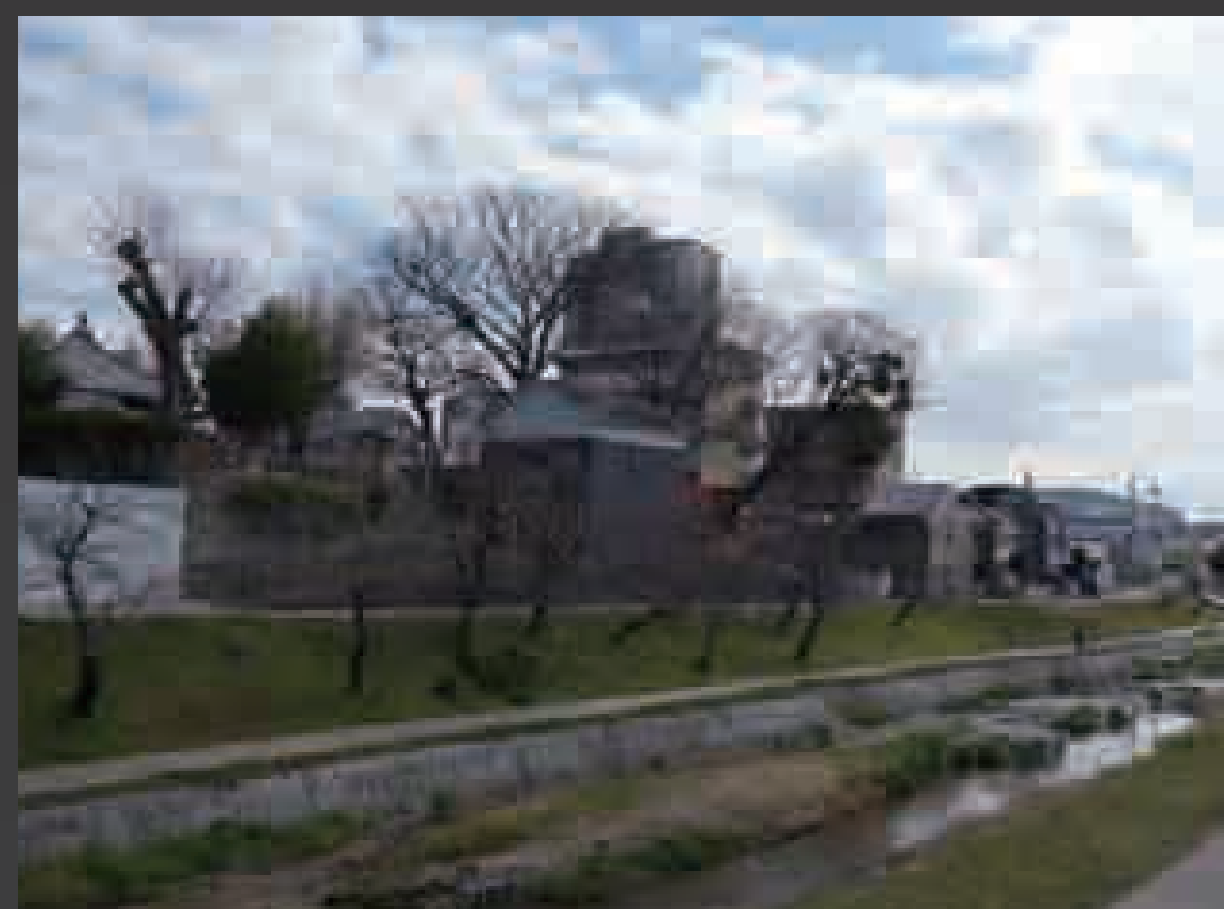


天神山と総堀－近世岡崎城の基礎固め

岡崎城本丸の谷を挟んだ北側への地へ、徳川家康公の祖父・松平清康が享禄3年（1530）に明大寺の地から大林寺を移し、岡崎城の北の守りとした。天正18年（1590）に城主となった豊臣方の田中吉政は、天神山を伐り開いて城の西の沼地を埋め、その材木で町家を建てたのが田町・板屋町であるとい

い、材木を伐り出したこと、ないしは伐り出した材木を積みおいたために材木町という名称がつけられたという。吉政以前の岡崎城下には連尺町、六地藏町が城東にあったとみられるが、吉政は旧来の町に新たに造成した町を繋げ一大城下町を造成し、町を堀と土塁で囲む総構えとし近世岡崎の基礎を築いた。

伊賀川東の段差



大林寺西側は矢作川河岸段丘の段丘崖となっており、その下を東海道と総堀が通っていた。現在の伊賀川も、近代にこの崖線を片岸として利用し開削された。

大林寺郭堀



江戸時代のはじめ、徳川家康公の命で藩主本多康重が大林寺郭堀を拡張した。約60メートルと城内で最も幅の広い堀で、段丘に元々入り込んでいた谷を利用したと推定される。

大林寺郭堀の発掘調査



これまでの発掘で、野面積みの石垣を発見。高さ7メートルを超え、犬走りを挟み上下に2段に積まれていた。浄瑠璃曲輪の外側はこの堀のラインが区画として残る。

二十七曲り沿いの商家



岡崎の特産品であった三河木綿の綿打ち道具である唐弓弦（板に弦を張り、これで綿をほぐす）を扱った旧商家の裏側には、総堀跡の段差がよく残っている。

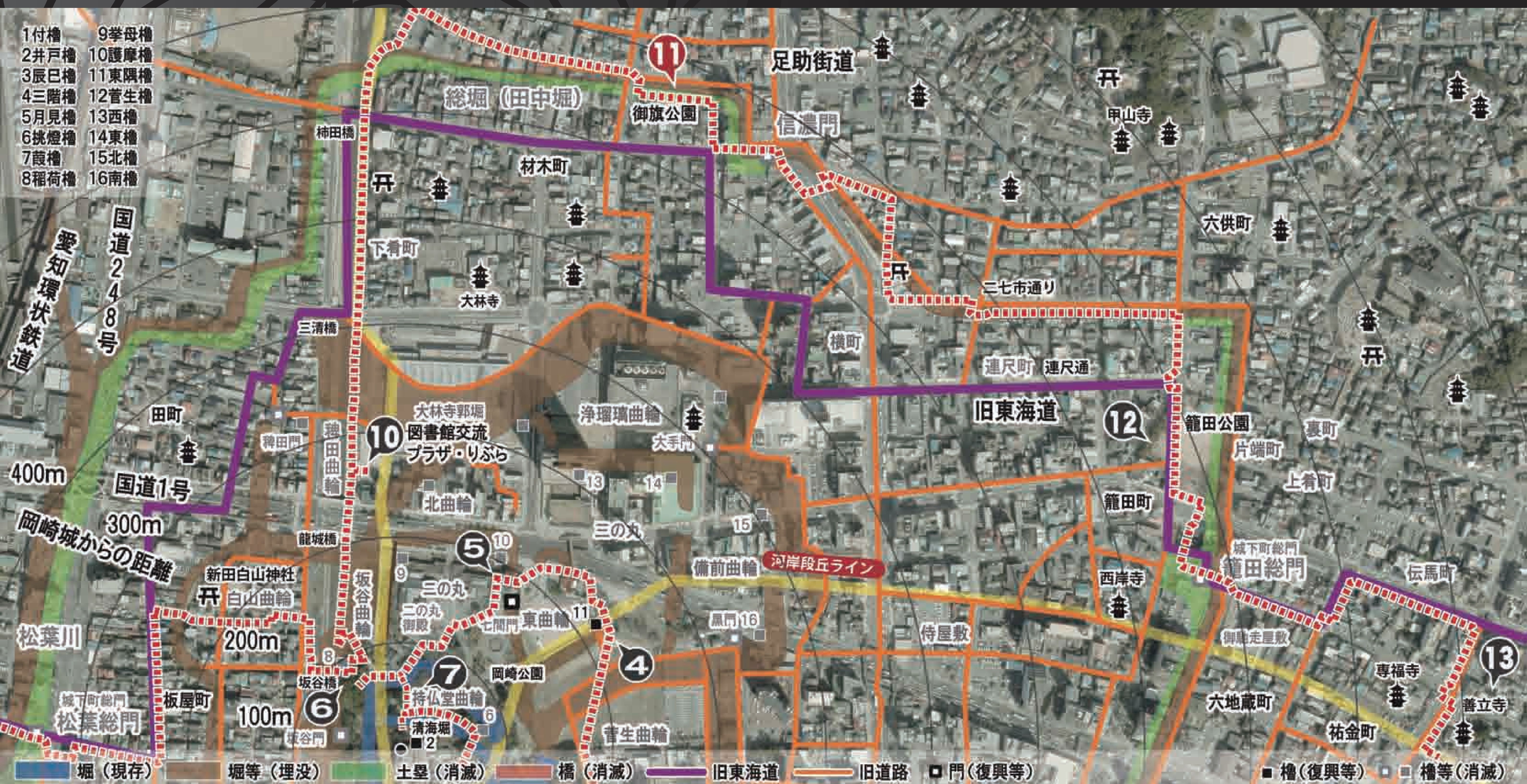
天下人ブランド！岡崎の城下町はどうつくられた？



DISCOVER
OKAZAKI

御旗公園

11 東海道、曲がって 延ばすよここまでも



城下町のはじまりー横町と連尺町

松平清康の時代、城の大手付近に市場が置かれ、連雀を背負った商人達が集住し連

尺町、横町ができたと伝わる。城の御用商人ともなり、菅生川の舟運から陸路への流通までも担った。

※ 物を背負うのに用い背負子（しよいこ）

東海道二十七曲りの延伸

田中吉政の時代には大林寺の南を通っていた東海道は、慶長 14 年（1609）の本多康重の時代に総構えの北辺に大きく廻され

た。これにより、東海道は「二十七曲り」と呼ばれる屈曲の多い道筋となった。

※ 城のほか城下町一帯も含めて外周を堀や城壁土塁で囲い込んだ日本の城郭構造

御旗公園南の段差



岡崎城の最も北側の総堀跡が、東西に長い現在の公園になっている。公園南側（東海道二十七曲りに沿った敷地の北側）に土塁と堀の高低差を感じさせる段差が続いている。

東海道二十七曲りの道幅



現在の建物の間に、東海道二十七曲りの道幅が残る。明治維新後の明治 2 年（1869）から同 4 年（1871）まで、対面所跡に藩校である允文館や允武館が建てられていた。

信濃門と道



信濃門から北へ延びる道は、足助から信州まで繋がり、塩の道、信州街道とも呼ばれた。菅生川の桜馬場土場、満性寺土場から荷揚げされた塩などの物資が運ばれた。

二七市通り南の段差



2と7のつく日に市が開かれる二七市通りの歩道南側の1区画奥まった場所は、一段高くなる地形が通り沿いに続く。石垣の高低差が総堀と土塁との境辺りを示すと考えられる。

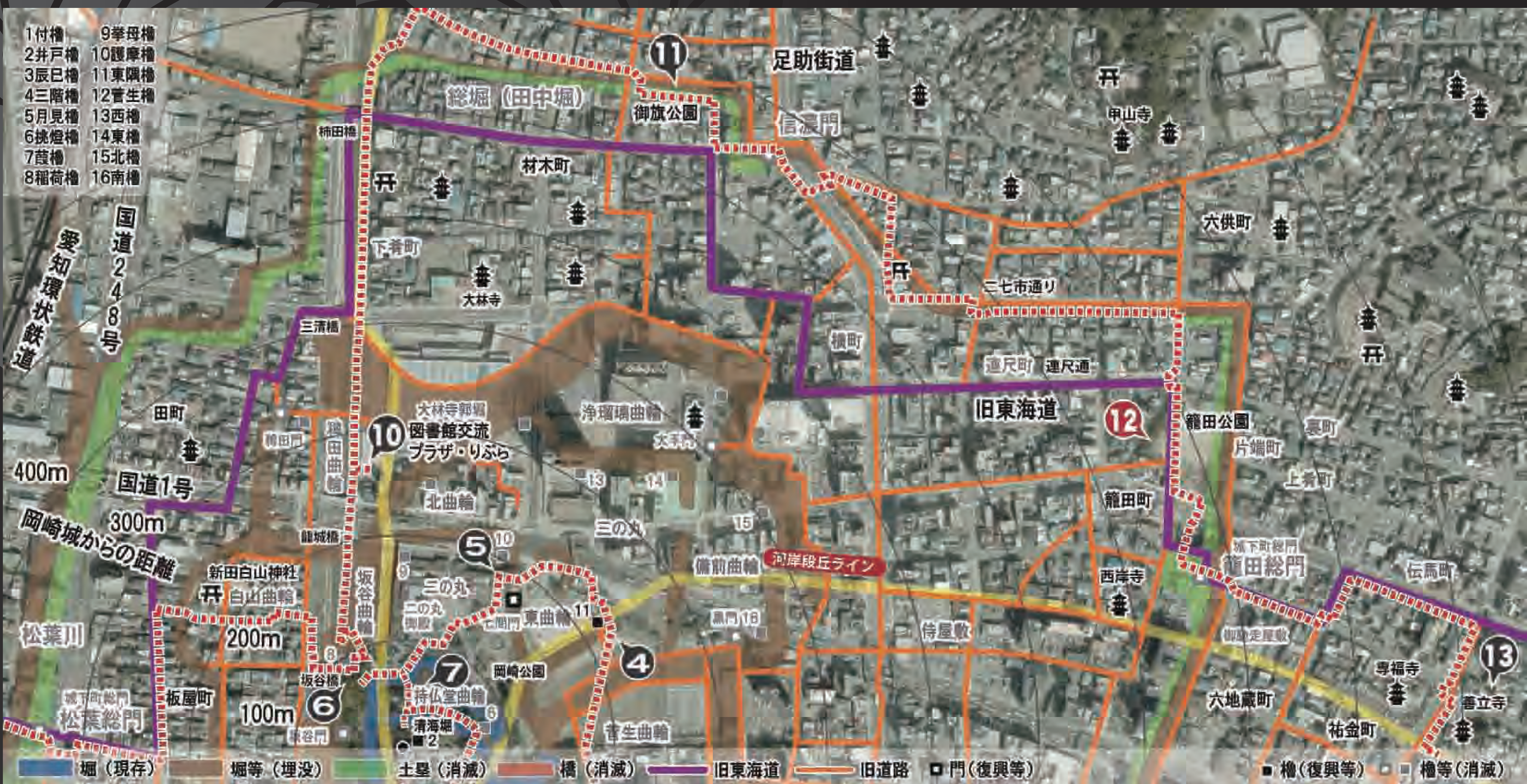
天下人ブランド！岡崎の城下町はどうつくられた？



DISCOVER
OKAZAKI

籠田公園

12 城の東に家康公 御用達の最強商人の町



伝馬町—伝馬制と榎町・八町越商人による宿場町創設

田中吉政の総構え建設と慶長6年（1601）の伝馬制により、城下を通った東海道沿いには、慶長14年（1609）に岡崎城総構え東に続き、伝馬町が新設された。道の南側には家康公の時代に菅生川端で伝馬役を担った旧榎町、北側には慶長12年（1607）の矢作川洪水により移転した八町

村の「八町越し」商人が並んだ。力のある町衆により商工業が栄え、岡崎宿としても賑わい、町人文化が花開いた。

籠田公園は、伝馬町と共に新設された籠田町にあり、東側は総構えの東縁辺の総堀・土塁の地割に沿う。南側は、菅生川（乙川）へ続く河岸段丘の段差を見通せる。

※ 伝馬（宿駅の間を往復し旅行者や貨物を次々に送る馬）の供給とそれに伴う労働に従事する仕事

丘陵上に並ぶ社寺群



城下町の北東側に龍の背のように連なる丘陵は、花崗岩が基盤となっている。丘陵上には、松平氏・徳川家ゆかりの社寺が建ち並び、城の北東の守りを固めた。

石屋町（裏町・花崗町）



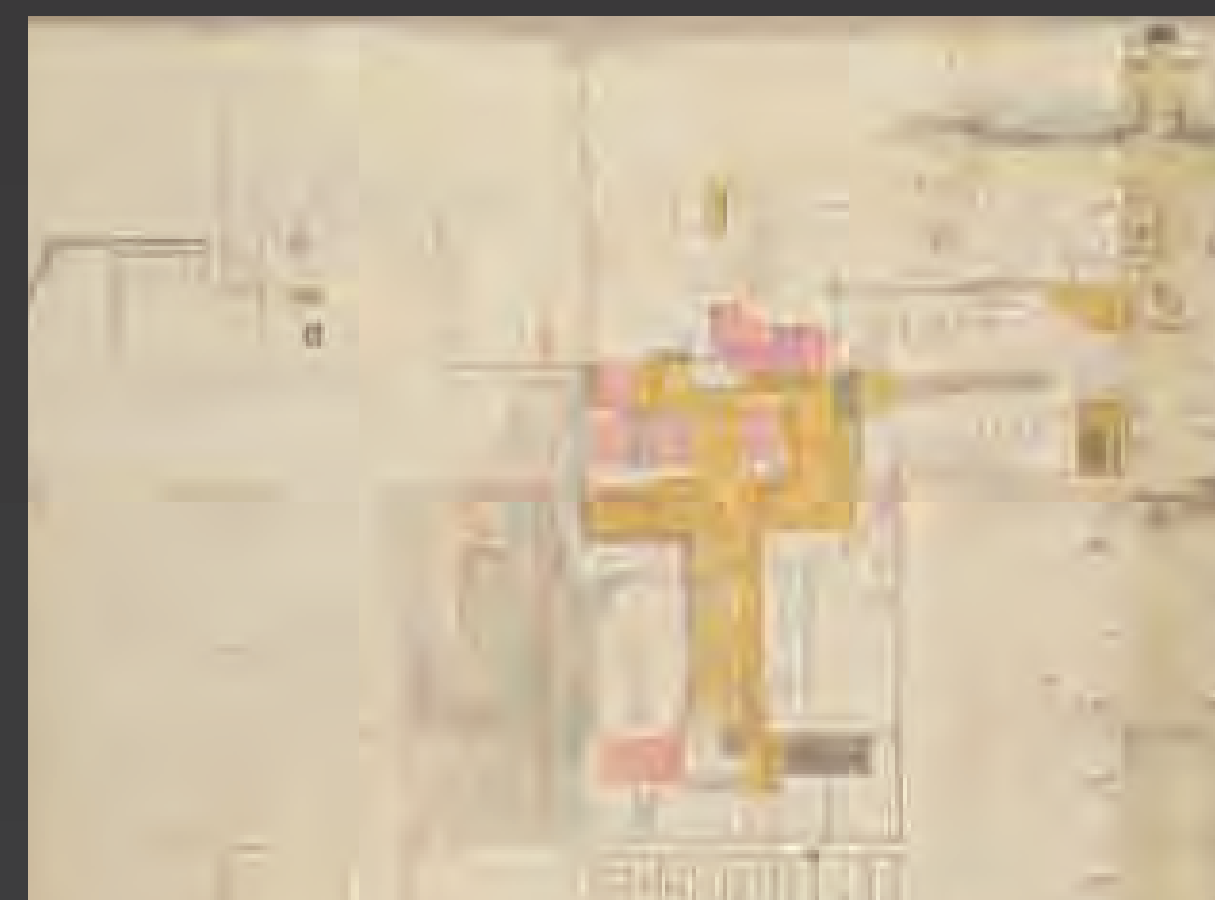
東海道の本北の裏町（現花崗町）では、田中吉政の城整備で大坂から呼ばれた石工たちが、良質な花崗岩で鳥居や灯籠などを造り、石製品加工が発展し、伝統産業となった。

籠田総門



承応3年（1654）水野忠善の時代に、岡崎城総構えの東の出入口、籠田町に設けられた。総門内側には番所も置かれ、東海道の通行者をあらためた。

御馳走屋敷（町並屋敷）



江戸時代に岡崎城主が幕府の公的通行者のために設けた接待所。朝鮮通信使、琉球使節団や御茶壺道中が休泊した。南側には変事退場の空間を設けていた。

天下人ブランド！岡崎の城下町はどうつくられた？

13 東海道をたどれば 川が見える



DISCOVER
OKAZAKI

善立寺



東海道の変遷ー総延長約4キロメートルの道筋

岡崎城の城郭範囲は、天正18年（1590）に豊臣秀吉の命により城主となった田中吉政の時代に、「田中堀」とも呼ばれる城下町を内包する総堀が巡らされたことにより決定された。この総堀え建設により慶長6年（1601）までに城下に引き入れられた東海道は、当初は河岸段丘の段丘

崖の下を通っていたと推定される。

慶長14年（1609）に伝馬町が新設されるのに伴い、総堀え外部の縁辺に沿うように北へとルートが変更された。河岸段丘沿いの平坦な面は、起伏がなく道筋を伸ばしていくのに適していた。

※1 城郭の最も外側にめぐらせた堀

※2 城のほか城下町一帯も含めて外周を堀や城壁、土塁で囲い込んだ日本の城郭構造

※3 段丘面と段丘面の間にある急な崖

岡崎城下二十七曲りの完成



正保2年（1645）に城主となった水野忠善の時代に岡崎は近世城下町としての形を整える。東海道の道筋は、河岸段丘の上下を南北に上り下りしながら東西に続いている。

専福寺の境内地と石垣



能見から慶長6年（1601）に城下を通った東海道を見下ろす現在地に移転。境内南は段丘崖を覆い、高石垣を積む。旧榎町である祐金町の名は中興の祖である「祐欽」にちなむ。

善立寺の境内地



家康公の祖父・松平清康により天文元年（1532）安城から総堀内東の菅生川沿いに移り、水野忠善の城下改造で正保4年（1647）に、桜馬場から上がった現在地に移転した。

専福寺と善立寺の役割



境内を取り囲むどっしりとした頑強な壁。まるで敵の襲来を監視するための高樓など、いかにも要塞という姿。いざという時の砦や要塞としての役割も果たしていた。